

2015年度 政治外交史Ⅰ 最終試験講評



今回の問題文は下記の通りでした。

〔問題〕

「桂園時代」について、(1)その概要と特徴を、講義の内容を踏まえながら説明し、(2)その歴史的意義について、自分の考えを述べなさい。

〔注意事項〕

◇(1)については解答を300字以上(解答用紙で10行以上・用紙の点線部分より下まで)記すこと。この条件を満たさない答案は、(2)の解答の分量や内容に関らず、答案全体として採点の対象としない。

◇解答用紙の黒いマス目(■)も、そのまま使用すること(飛ばさずに記入すること)。

◇解答の分量が合計900字を超えるときは、答案用紙の裏面に続きを書き、1890字を超えるときは挙手して2枚目の答案用紙を受け取ること。

◇この問題用紙は持ち帰ること。

1. 採点講評

今回は、問題がオーソドックスだったこともあり、おおむねよく書けていました。触れるべき論点は、講義レジュメの46ページにまとめられていますが、多くの答案が、それなりにカバーできていたようです。一方で、基本的な事実(桂園時代の始期と終期、その政治的な構図など)について誤った理解をした答案が何枚か見られたのと、きちんと読み直せば簡単に見つかるような単純な誤字が散見されたのが残念です。とくに気になったのは、ある答案にみられた「概用」という誤字です。問題文に書いてある漢字を、答案で書き間違えるというのは、不注意もはなはだしいと言わざるを得ません。これについてはとくに大きく減点しました。

2. 成績分布

①履修登録者全体(講義に一度も出席しなかった者も含む)における成績分布

S:12.9% A:12.9% B:3.2% C:6.5% X:9.7% F:54.8%

②期末試験受験者における成績分布

S:28.6% A:28.6% B:7.1% C:14.3% X:21.4%

3. 解答例

次ページを参照してください。ただし、あくまで「解答例」ですので、この通りに書かなければいけないわけではありません。もし自分の解答について、個別にコメントしてほしいという人がいましたら、10月末までに私の方までメールで連絡してください。

2015年度 最終試験 答案用紙

科目名	担当者	実施年月日	枚数
政治外交史Ⅰ	伊藤信哉	2015年7月30日(木) 10:15～11:35(80分)	1/1

1. 桂園時代の概要と特徴

日露戦争のさなかに、「山県・官僚派」の桂太郎首相と、政友会の幹部だった原敬の間で、戦争の円滑な遂行と、来たるべき講和条約の締結に向けた、政治的な協力関係が成立した。これを受けて、1905年秋に日本国内で激しい講和反対運動が生じたさいも、原は政友会を統制して、講和の迅速な成立に協力した。桂はその見返りとして、12月に首相を辞するさい、西園寺を後任の首相に推挙する。このとき以来、1912年12月に第2次西園寺内閣が崩壊するまで、山県・官僚派を率いる桂太郎と、政友会総裁の西園寺公望が、代る代る政権を担当するシステムが維持された。これを桂園時代と呼ぶ。

それまで、内閣が交替するさいには、後継首相の選定のために元老会議が開かれるのが慣例だったが、桂園時代になると、そのような会議は開かれなくなり、なかば自動的に、桂と西園寺の間で政権が授受されることとなった。またこの時期には、政治的な対立から衆議院が解散されることもなく、この時期に行われた2回の総選挙は、ともに任期満了によるものであった。

2. 桂園時代の歴史的意義

その歴史的意義としては、次のふたつがあげられる。ひとつは伊藤博文や山県有朋に代表される「維新第2世代」が一線を退き、桂と西園寺に代表される「維新第3世代」が、政権を担当するようになったことである。また同じ時期、彼らを支える官僚機構においても、藩閥出身者に代って東京帝大の卒業生や高等文官試験の合格者が、トップを占めるようになった。すなわち桂園時代は、政治と行政の最高指導者の世代交代が進んだ時期であった。

第2の意義は、1920年代の後半に成立する「政党内閣制」の基盤を整えた点である。桂園時代は「政友会」と「山県・官僚派」という2つの政治勢力が、交替で政権を担った時代であった。このような「政権交代システム」は、その後、山県・官僚派が「桂新党(立憲同志会)」に衣替えし、さらに憲政会、民政党へと発展することで、1920年代後半の「政党政治の時代」へとつながってゆく。桂園

30W x 30L = 900(859)

学籍番号	氏名	平常点	試験点	裁量点	総点

時代は、その基礎となった時代であり、その歴史的意義は重要と
かんがえられる。

以上